

峡雲荘

一族経営

高橋孝子さんは、十和田八幡平国立公園内にそびえる岩手山山麓を流れる松川近辺に三軒ある温泉宿のひとつ、峡雲荘の経営者です。孝子さんは営業責任者である夫の俊彦さんとともに峡雲荘を切り盛りしています。これらの宿のとても珍しいところは、そのいずれもがすべて同じ一族の人々によって創業されたということです。

孝子さんの曾祖父スエジさんは、松川にある3つの温泉のうち、最も下流の、現在松楓荘という宿がある、最初の温泉の開発に中心的な役割を果たしました。そこは美しい場所でしたが、道路でのアクセスが困難でした。

その次の世代の、俊彦さんの祖父フクジロウさんは、地元の硫黄鉱山の下請け事業者として働いていました。もともと山が好きだったフクジロウさんは、日光を訪れたことがきっかけで自ら温泉宿を立ち上げたいと考えました。彼は林野庁が所有する土地を使用する権利を取得し、そこで温泉を発見しました。フクジロウさんが自分で温泉を開発するのは難しかったため、行政が事業を引き継ぐことになりました。フクジロウさんは1953年に57歳の若さで亡くなりましたが、村は温泉とキャンプ場を備えた、利用に助成が適用される「国民宿舎」を建設し、1960年に営業を開始しました。

俊彦さんの父中栄さんは、スエジさんとフクジロウさんの意志を継ぎたいと考え、この地域の開発を続けました。中栄さんは、孝子さんの叔母・上野はるえさんと協力し、1961年に3軒目の旅館・松川荘を開きました。1980年、俊彦さんは、祖父フクジロウさんがきっかけで生まれた「国民宿舎」を村から買い取り、峡雲荘として再オープンしました。こうして、松川温泉の3つの温泉旅館はすべて、一つの家族によって経営されるようになりました。